2020 年 2 月
（公財）かめのり財団

かめのり中高生アンバサダープログラム 2020　報告

【目標】
「かめのり中高生アンバサダープログラム 2020（KTAP2020）」の目標は以下の三つである。
①様々な場で、自身のコミュニケーション能力を実感する
②フィリピンの文化、社会などを知り、文化の異同を理解する
③人との協働においてどのような能力が必要なのかを、体験を通して知る

【日程】
2020 年

1 月 25 日（土）	羽田空港で出発前オリエンテーション実施後、PR421 にて出発、夜マニラ空港着
1 月 26 日（日）	市内観光（イントラムロス内マニラ大聖堂、サン・アウグスティン教会、サンチャゴ要塞、リサール公園）、振り返り
1 月 27 日（月）	デラサール大学訪問、Jose Abad Santos 高校訪問、振り返り
1 月 28 日（火）	JICA、Unang Hakbang Foundation 訪問、ケソン市に移動、振り返り
1 月 29 日（水）～31 日（金）	JS フォーラム in フィリピン
2 月1日（土）	古代文字・フィリピン音楽・舞踊、振り返り夕食会
2 月 2 日（日）	PR422 にて帰国

【報告】

1.　市内観光 （1 月 26 日）

午前中はイントラムロスの中を散策。サン・アウグスティン教会とミュージアム、サンチアゴ要塞、カーサ・マニラ博物館を見学した。スペイン風フィリピン料理のレストランで昼食をとった後、午後はマリア大聖堂を見学し、リザール公園でタスクに挑んだ。事前オリエンテーションで習ったフィリピン語を使って、公園にいるフィリピンの人に声をかけて一緒に写真を撮ってもらう、子ども達とフィリピンの歌を歌ってその様子を写真に撮る、という二つのタスクで、4 人ずつのグループに分かれて公園内に散らばっていった。どのグループもなかなか最初の声かけができずに苦労していたが、30 分後に戻ってきたときには「フィリピンの人は優しい」「子ども達がとてもかわいかった」とタスククリアの喜びを語ってくれた。

夜の振り返りでは、フィリピンの歴史に触れることができた、戦争のことを考えた、日本軍がひどいことをしたのに日本を恨んでいないフィリピンの人の寛容さに感動した、フィリピン人のウェルカムな心、にこにこして優しいところに日本人との国民性の違いを感じた、街が活気にあふれている、教会周辺で子どもが民芸品を売りに来ていたが、それをどう捉えたらいいのだろうか、といった意見が

でてきた。初日から様々なことを吸収したようだった。

2.　デラサール大学訪問 （1 月 27 日）

デラサール大学はアテネオ大学と並んで、フィリピンの私立大学の双璧である。裕福な層が通う大学で、KTAP 生のフィリピンのイメージが変わるほどキャンパスは美しく、施設も充実している。ここでは、日本研究会の学生達 10 人ほどが交流ゲームやキャンパスツアーをしてくれた。その後、KTAP 生が準備してきた日本についてのプレゼンテーションを行った。今年はタール火山の噴火の影響でラグーナキャンパスにある高校訪問ができなくなってしまったためランチまでの短い訪問となったが、大学生が日本に対する興味を示してくれたので、KTAP 生は訪問を大いに楽しむことができた。

3.　ホセ・アバド・サントス高校訪問（1 月 27 日）

午後はホセ・アバド・サントス高校に移動。ラグーナキャンパスに訪問できなくなったため、急遽同校の日本語担当の先生に依頼をして訪問が実現した。ほんの数日前に依頼したにもかかわらず、しっかり準備をしていただき、熱烈な歓迎を受けた。9 年生による日本語の「カントリーロード」、10 年生による「バハイ・クボ（フィリピンの童謡）」とそれに出てくる野菜の紹介があり、フィリピンのダンスには KTAP 生も誘われて踊りの輪に加わった。ここでも日本についてのプレゼンテーションをして、フィリピンの高校生に喜んでもらった。その後日本語クラスの作成物の展示を見たり、ミリエンダ（おやつ）を一緒に食べたり、写真を撮り合ったりして、同世代との交流を楽しんだ。

4.　JICA 訪問 （1 月 28 日）

国際協力の意義や開発協力の目的（なぜ開発途上国を支援するのか）、そしてフィリピンにおける JICA の活動についてプレゼンテーションを行ってくださった。少子化の日本と違いフィリピンの労働人口が今後右肩上がりに増えていくこと、国の政策が「Build! Build! Build!」であることなども学び、KTAP 生のフィリピンに対するイメージも変わったようだった。KTAP 生からの質問では、「仕事のやりがいは？」「国際協力の仕事を将来したいが、どんな資質が必要か？」でなど自分の将来と結び付けたものも出ていた。ホテルに帰った後の振り返りでは、「日本がいかに恵まれているかを改めて認識した」「フィリピンも日本も災害が多い国同士、助け合っていきたいと思った」「プレゼンテーションが格好良くて刺激を受けた」という感想が聞かれた。

5.　UHF 訪問 （1 月 28 日）

UHF は貧しい地域で学習支援などを無料で行っている組織である。放課後集まってきた子ども達と折り紙、ケン玉、ブンブンゴマ、おもちゃのボーリングなどをして 2 時間ほど遊んだ。また、皆で歌やダンスで盛り上がり、双方にとってよい経験となった。最初は UHF の子ども達もシャイで遠巻きに KTAP 生を見ていたが、そのうちにすっかり打ち解けた。KTAP 生は「初めは不安だったが、とても楽しかった」「小さい子ども達の面倒を大きい子供たちが見ていてすごいと思った」「あげたケン玉を見てこれからも自分を思い出してくれると嬉しい」「子ども達の純粋な目が印象的だった」といった感想を振り返りで述べていた。

6.　JS フォーラム in フィリピン（JSFP） （1 月 29日～31 日）

フィリピン人高校生 30 人、KTAP 生 12 人、フィリピンの日本語教師 18 人が集まり、3 日間の JSFP が行われた。今年のテーマは「Let’s be ECO-Friendly: Plastic を減らそう!!」で、一昨年、昨年と考えてきたゴミ問題、エコ、環境問題の中からプラスティックゴミに焦点を当てた。生徒プログラムでは、1 日目は事前課題（自分の周りのエコ活動とプラスティックゴミに関する調査）をシェアした後、ボホール島で活動している NGO イカオ・アコの活動についてのプレゼンテーションを聞き、プラスティックゴミが環境にもたらす影響について学んだ。2 日目は近くのモールにフィールドワークに出かけ、プラスティックゴミ削減に向けての店舗や客の取り組みを調査した。最終日（3 日目）のファイナルアウトプットは学んだことを 3 分のスキット（短い劇）、1 分の説明でグループごとに発表した。6 つのグループはそれぞれユニークな設定でプラスティックゴミを減らそう、プラスティックに代わるものを考えていこう、賢くプラスティックを使おうというメッセージを上手に伝えていた。スキット作成の過程では言語の問題などでどのグループも苦労していたが、ディスカッションを重ねてそれぞれの思いの入ったスキットとなっていた。

今年の JSFP で気づいた点は以下のとおりである。

- フィリピンのコアグループの先生方のエネルギッシュなファシリテーション、盛り上げる力、明るい雰囲気を作る力に KTAP 生達は驚いていた。
- 昨年と同様に 1 つのグループに日本人が 2 人入ったので、助け合っている様子が見られた。今年も英語やコミュニケーションスタイルで苦労していた生徒が多かったが、毎日の振

り返りでお互いにアドバイスをしながら乗り越えていった。

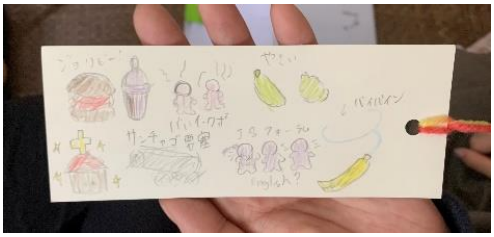
- ファイナルアウトプットのスキットはできるだけ日本語を使うようにという指示が出され、セリフのすべてが日本語というグループがほとんどだったことは素晴らしかった。
- 昨年取り入れられ好評だった日本語/タガログ語レッスンの時間が今年もあった。フィリピン人と日本人がそれぞれの言葉を教え合うことで、お互いの気持ちを理解することができたようだった。初日夕食前のこのセッションで皆の距離が近づいた。

全体としてとてもよい JSFP であった。KTAP 生からは悩んだこと、苦労したことも含めて今まで一番密度の濃い 3 日間だったという声が上がった。コミュニケーション力をつける、文化の異同を知るといったこと以外に、プラスティックごみ問題、エコ活動についても考察を深めた。

7.　フィリピン古代文字・音楽・舞踊ワークショップ　（2 月 1 日）

フィリピン大学で古代文字・伝統的な楽器、舞踊を体験した。古代文字ワークショップでは、自分の名前を古代文字でどう書くかを学び、その後自分と友達へのお土産としてしおりを作成した。

名前を書いた裏面にはフィリピンでの体験で思い浮かぶことを絵に描き、いろいろと振り返るよい機会となった。音楽・舞踊ワークショップでは、基本的なリズムを学び、ダンスとのコラボレーションを行った。指先までの細かい表現に苦労しながらフィリピンの伝統的な文化に浸った。ワークショップ後は、映画館、劇場まで揃っている大学の広い敷地に驚きながら構内をジプニーで回った。



8.　振り返り夕食会 （2 月 1 日）

最終日の夜は国際交流基金マニラ日本文化センターからも 3 人の方が参加してくださり、振り返りの夕食会を行った。KTAP 生がフィリピンでの体験を初日から最終日までを分担して自分達の言葉で振り返った。「全部で 15 分くらい」という指示を出していたのだが、皆の思いが大きく深く、結局 45 分の発表となった。食事の後はそれぞれの思いを自由に話してもらい、国際交流基金マニラ日本文化センターの方々からも温かいアドバイスやメッセージをいただいた。KTAP 生からは、「失敗を恐れなくなった」「固定観念を持たないことが重要だと学んだ」「自分の意見を言うことに抵抗がなくなった」「感謝を学んだ」「将来したいことがはっきりしてきた」などの熱い思いが語られた。

9.　全体として

腹痛や食欲不振など体調を崩した参加生が何人かいたが、病院を受診するほどまでには至らず、全員がすべてのプログラムに参加することができたことはよかった。4 回目の実施となった KTAP であるが、毎年グループのカラーが違う。今年の参加生達は事前オリエンテーションのときから協調性は優れているが、自分の意見を述べることに慣れていない印象があった。しかし、様々なことを体験することにより、多くの参加生が自分の意見を持つことの重要性に気づいたと振り返りで発言し、また実際に自ら考えて壁を乗り越えていく様子が見られた。毎日の振り返りを通して、お互いに刺激し合って皆の視野が広がっていったことは大変嬉しいことである。プログラムを通して学んだことや気づいたことを忘れずに、更にいろいろなことにチャレンジしていってくれることを KTAP 生達に期待している。